
ゲーテンベルクの歌 【Side Story】

カオリエンドウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

グーテンベルクの歌 【Side Story】

【Nコード】

N8732E

【作者名】

カオリエンドウ

【あらすじ】

『グーテンベルクの歌』の本編から独立した形の小話をサイドストーリーとして連載。これを読めば本編がもっと楽しくなる……かも。 8 / 30 「嵐の夜2」をUP

重要登場人物紹介（前書き）

登場人物は本編とまったく同じです。

でも、こっちから読むという人（そんな人がいるのか……）のために、改めて紹介します。

重要登場人物紹介

サーシャ・ティアイエル・グーテンベルク

18歳。日の当たり具合では金に輝くうすい茶色の髪。背は普通よりやや高め。白磁の肌、花の咲いたような唇、アーモンド形の切れ長の瞳は神秘的な紫。それを取りかこむ長いまつげ。化粧をしていなくても、誰が見ても納得の美人。本人はその事に気づいていない。言動や行動などを見るとどこか幼い印象。また、やや天然か。世間知らずだが、明るく真っ直ぐで、人を疑わない性格。薬学の知識がある。

ジェラルド・キーナン

28歳。短髪の黒髪、蒼い瞳。目つきは鋭いが男らしく誠実そうな見た目。長身でがっしりした体型。基本的に真面目な性格で何事にも動じない頼りになる大人。

サーシャには無表情で何を考えているのか分からないと思われるが、実は女性の扱いが苦手なだけ。

それほど口数は多くなく、口より先に行動するタイプ。剣の實力はかなりのもので、魔法も魔術師ほどではないが高度の魔法を扱う。属性は水。

ロレンス・アルベルト・サファヴィー・ディアス

26歳。やさしい眼差しのグレーの瞳に暗めのブロンド。背はジェラルドほどではないが長身、体つきもしっかりしている。整った端

正な顔立ちの美形。気配り上手で話も上手い。それに加えて家柄も良いので女性には全く困らない。

代々騎士として続くディアス家の長男であり、幼い頃から名家の跡取りとしての教育を受けてきた。優雅な物腰、女性には平等に親切的な典型的な騎士。剣の腕もなかなかのもの。

現在、大尉。魔法は使えない。

アイリス・ヴィシユー・リトリア

22歳。緑の瞳に赤褐色の髪、身長は平均的。勝気な瞳のさっぱりした美人。

性格もさっぱりしている。思った事ははっきりと口に出すし、口に出さなくても顔に出る。

治癒の魔法を使う魔術師を多く輩出していることで有名なリトリア家の末娘でれっきとした貴族の令嬢。本人は柄じゃないと思っているが、やはり、言葉遣いや態度にはそれらしいところが見られる。しかし、面倒見がよく、心根は優しい。薬学や医学の知識がある。

王：イスニア国二代目王　オリバー・イスニア・ヴァレンシュタイン

30歳で王位を継ぎ、現在47歳。長く続いた争いの時代を治め、イスニアに安定をもたらした力のある男。しかし不安定な時代が長く続いたため、平和になった現在も戦争に対して常に強い警戒を続け、イスニアの平和を守る事に日々心を砕いている。

妻はロクサヌ。子供は三人。

出会い 1 ジェラルド（前書き）

時系列的には本編第一章：命令の後。

ジェラルドと王の出会いの物語。

出会い1 ジェラルド

その夜、部屋で王との出会いを思い出していた。
そう、俺は王に恩がある。

あの時出会っていなければ、今俺はここにはいないのだから。

俺は一人、森の中をさ迷っていた。

出会ってしまった敵の兵から身を隠そうとばらばらの方向に逃げたが、そのまま仲間を見失ったのだ。

みんな、殺されてしまったのかもしれない……。

それが、5日前。もう2日以上何も食べていない。水も底をついた。このままだとまずい……。

夜、意識が朦朧としかけた頃、俺は馬に乗った兵士と遭遇してしまった。相手は明らかに敵だった。兵士の胸には敵国オスレイと同盟を結んでいたイスニアの紋章が縫い付けられていた。

「子供がいるぞ！」

兵士は叫んだ。

もう駄目だ。すぐに仲間が集まってくる。相手は馬だ。おそらく逃げ切れない……。

俺は覚悟を決めて腰にぶらさげていた剣を取り出した。すると、木の陰から別の兵が次々に現れた。絶望的だった。

こんな小さな剣では何の役にも立たない。

とっさに魔法を放った俺は、残り少なかった体力を奪われ、その場で意識を失い倒れこんだ。

目を開けると白い天井が目に入った。体の下には白く清潔なシート。怪我をしていた体には丁寧に包帯が巻かれていた。

音が聞こえない。

今まで常に共にあったはずの爆音や人々の悲鳴、怒号が聞こえなかった。

代わりに聞こえるのが鳥のさえずり。それがやけに不思議で、不気味だった。

ここはどこだろう。自分は死んだのではなかったか……。

そうぼんやり考えていると男が一人部屋に入ってきた。その男の手には湯気を立てた皿があった。

「気づいたか。弱っているのに魔法を使うから倒れた。食べるといい」

それはスープだった。慌てて手を伸ばしてかき込んだ。

「ゆっくり食べる、誰も取ったりはしない」

生き返るようだった。温かいスープが喉を通して体全体に染み渡る。

助かった……。

俺は食べ終わると息をついて聞いた。

「ここは、どこだ？」

「イスニア国だ」

俺は男の答えに目を見開いた。

敵じゃないか……なんてことだ。

慌ててベッドから降りようとして倒れこんだ。体が上手く動かなかった。

「落ち着け、お前に危害を加えるつもりはない。お前はどの生まれだ」

その男は落ち着いた声に穏やかな目をしていた。こんな表情の大人を見たことはなかった。

俺はおかしなことに、敵国の人間を目にしていながら安堵を覚え

た。そして気がつけば、今までの出来事をぼつぽつと話し出していた。

俺はカーナで生まれ、その孤児院で育った。

親は知らない。生まれたときからずっと戦争は日常だった。食べるものと言えば豆や穀物、ひどい時には名の知れない雑草も食べた。乾燥させた肉や固いパンは滅多に食べられないごちそうだった。

生まれてから今までこんなに親切な扱いを受けたことはなかった。自分にとって、大人とは戦うべき相手だったのだ。毎日を生き抜くために。孤児院は4歳になれば追い出された。もう国のどこにも子供を養うだけの力は残っていなかった。

この力のおかげで戦力と数えられた俺は、兵士に従っていれば最低限の食事にありつくことができた。

しかし、それだけだった。きっと動けないほどの怪我をすればその場に捨てていかれただろう。逆らえば殺されただろう。

自国の兵士も国民を守る余裕などなかった。みんな自分のことで精一杯だったのだ。国中、どこに行っても戦禍と貧困と絶望から逃れることは出来なかった。

しかし、ここはどうだろう。

自分の国にこんなに静かで穏やかな場所があったらどうか。

こんな国を相手に勝てるわけがなかったのだ、と俺はやけに冷静に思った。

「お前は強くなる。私にお前の力を貸して欲しい。約束しよう、平和な国を作ると。これ以上、お前のような目に遭う子供を増やさないために」

男はそう言った。

そうだ、どこにいても同じ事だ。

弱い者は死に、強い者だけが生き残れる。この大人は自分を強くしてくれるという。そして、自分を必要としてくれると。

今まで、誰かに必要とされたことがあっただろうか。

きつと今より悪くなることはない。

それならば、信じてみるのもいいのではないか。生まれて初めて人間的な扱いをしてくれたこの男を。

「私はイスニア国第一王子、オリバー・イスニア・ヴァレンシユタインだ。お前の名前は？」

「俺は、ジェラルド」

7歳だった。

その3カ月後、カーナは滅びた。

その後、俺は代々続く軍人の名家、キーナンの養子として迎えられた。名家と言えども軍人だ。力がなければ評価されることはない。俺は無我夢中だった。生き残るには強くならなければならない。力がなければ自分を守ることができない。12歳で見習い兵として城に上がった俺はただひたすらに剣の腕を磨き、魔法の力を伸ばした。

時が経つのはあっという間だった。気づけば王子は王になり、俺は繰り返される戦争で力をつけ、中佐にまで出世していた。

王との出会いからもう20年以上が経った。

あの時の約束どおり、イスニアには平和が訪れた。

今まで、目の前の敵にただひたすら剣を振るっていた俺は、ふいに訪れた平和な日常に戸惑った。もう、戦う必要がなくなったのだ。

だが一方で、争いが終わってもあの娘は国のために自由を奪われるという。

国とは何だろうか。国のための犠牲とは本末転倒ではないのか。

平和とは、誰かの犠牲の上にしか成り立たないものなのか。

分かっている、あの人は王だ。

俺とは違う。

国を守り、育てる義務を負う者。

答えは、見つかりそうにない。

出会い2 オリバー（王）（前書き）

同じく、本編：命令後の話。

ジェラルドの話とパラレルになっています。

出会い2 オリバー（王）

キーナンに密かに命令を下した夜、
私は彼との出会いを思い出していた。

私はまだ25歳で、第一王子だった。

国境を接する国カーナとオスレイはもう8年もの間争いを続けていた。

イスニアは初め中立を保っていたが、戦火が及ぶのを避けるため、戦況が見え出した1年ほど前からオスレイの要求に答え、同盟を結んでいた。兵士を戦場に派遣することはしなかった。しかし、この同盟により形式的にはイスニアとオスレイに挟まれる形となったカーナが落ちるのは時間の問題だと思われた。

私はその時、カーナとの国境を守る兵士たちの激励に訪れていた。戦場はカーナであったため、イスニアに戦火が及んでも不思議ではなく、国を分かť深い森には通常の倍以上の兵士が控えていた。

知らせを聞いてその場に駆けつけた時、その子供は氣を失って倒れていた。

ぼろぼろの格好をしたやせ細った子供だった。兵士に見つかり剣を構え、魔法を放ったがそれと同時に体力を奪われ、倒れ込んだらしかつた。

こんなに幼い子供も戦わなければ殺されることを知っている。
私は1歳になったばかりの自分の子の事を思った。我が子がこの子

供くらいの年になる頃には戦争をなくすことができるだろうか……。なくさねばならない。私はそのために存在しているのだ。

子供の放った魔法は強い部類に入る水の魔法だった。魔法は才能がなければ使えない。そしてほとんどの場合それは遺伝によるものだった。

この子供が魔法を使いこなしているところを見ると、生まれつき偶然に強い魔法の力を持っていて、戦争中繰り返し使うことで上手く扱えるようになったのだろう。

そうでなければ自然と魔法が扱えるようにはならない。

自分の持つ弱い魔法の力を呼び起こすには長い訓練が必要とされるし、強すぎる力を制御するにも力が要る。

一晩眠っていた子供は次の朝、目を覚ました。

真っ直ぐな目をした子供だった。生きる事を諦めていない強い目。戦場で生まれ、育ちながらもその目は光を失っていなかった。

話によると子供は仲間とはぐれてしまい、知らぬ間に警備の目も抜けてこの国に迷い込んできたらしかった。

兵士たちに警備の強化を言い渡さねばと思いながら私は子供に告げた。

「お前は強くなる。私にお前の力を貸して欲しい。約束しよう、平和な国を作ると。これ以上、お前のような目に遭う子供を増やさないために」

そうだ、お前はきっと強くなる。この年にして困難を自分の力で乗り越えることを知っている。そして、平和のありがたさを。

私はいずれこの国の王となる。平和な国を作り、国の民を守る義務を負う。

お前には国など関係のないものだろう。だが平和を作るには力が要る。力がなければ大切なものを守ることとはできない。その力を私に貸して欲しい。

「私はイスニア国第一王子、オリバー・イスニア・ヴァレンシユタインだ。お前の名前は？」
「俺は、ジェラルド」

その3カ月後、戦争は終わった。

あれからもう20年以上が経った。

私は王に即位し、不安定だったイスニアも5年前に隣国ガレノスと和平を結び、やっと安定した日々を手に入れた。

そしていつの間にか、子供は出逢った時の私の年齢を超えていた。

気づいてはいるのだ。お前が疑問を感じていることに。

しかし、分かって欲しい。これが私のできる最大限の譲歩だ。今、この平和を壊すわけにはいかない。

私は王として命令を下した。

淡い光 ロレンス（前書き）

オルディアの町ではこんな出来事もありました。

本編ではあまり語られないロレンスの心の中は……。

淡い光 ロレンス

「何だ、やりあったのか？」

ジェラルドの言葉に僅かに痛む口元に手をやった。

「そんなに酷いか？」

すると彼は肩をすくめた。

「まあ、殴られたと分かるくらいには」

それを聞いて内心、面倒な事をしてくれたと思う。

さっきまで町に出ていたのだ。そこで体格のいい男に絡まれた。

まあよくある事だった。自分の顔は時々、不要ないざごさ呼び寄せる。女性に近づくのには苦勞しないが、男を相手にするのはあまり褒められたものではなかった。

今日も典型的なパターンだった。

隣にやってきた酔った男が「女みてえな顔だな」と野次を飛ばしてきたのだ。

珍しい事ではないため、もちろん無視した。それが気に入らなかつたらしい男はいきなり殴りかかってきたのだ。ただの酔っ払いだ。殴り返せば黙るかと思えば、逆上した男は剣まで抜いた。

見くびられたものだった。自分の顔はどうも相手を油断させる効果まであるらしい。それでも腕にはそれなりに自信がある。二、三度剣を交えただけで持っていた剣を弾かれた馬鹿な男は、あっけなく降参した。

……酷い顔だな。

鏡を覗き込んでみると、切れた口の端では血が滲にじんだまま固まり、うっすらと青く腫れて熱を持っていた。

朝には痣あざになるか……。

だが今更仕方がない。とりあえず、顔を洗って血を落とす。明日

の彼女たちの反応を心配しながら眠りについた。

朝、思ったとおり、私の顔を見た途端にサーシャが悲痛な声を上げた。

「喧嘩したの!？」

何とも可愛らしい言い方だった。喧嘩、とは。剣を抜いて打ち合ったと言ったら気絶してしまうかもしれない。

「ちゃんと消毒した？」

「洗ったよ」

適当に返すとアイリスには呆れたような顔をされる。

「ロレンス、こっちに来て座って」

彼女が何をしようとしているのかは明らかだった。

「別にいい。ちょっと口が切れたただけだ」

何故か世話になりたくない気分だった。大した怪我ではないのだ。わざわざ魔法で治してもらわなくてもすぐに治る。

それに、やや面白そうな表情のジェラルドと興味津々な様子のサーシャが気になった。なんとなく見世物の様な気分だ。

「今がチャンスよ。私の体力がない時は治せって言っても治してあげないんだから」

アイリスはそれに気づいたのか悪戯っぽく言った。

「ロレンス、顔に傷が残ったら大変よ。綺麗な顔なのに」

サーシャは大真面目だ。それに思わず苦笑する。

「サーシャに言われるとはね。そう思わないか？」

私は敢えてジェラルドを見て言った。

「……あ?……あ、ああ」

自分に飛び火するとは思っていなかったらしいジェラルドはなんと間の抜けた返事だった。サーシャを見て口籠るように言う。私の意図に気づいたらしいアイリスは声を出さずに笑う。その顔のまま「早くこっちに来て」と促す。

私はそれに満足して、大人しくアイリスの言葉に従うことにした。

大人気ないとは分かっているが、ジェラルドの意外な一面を知ってからはどうもからかいたくなるのだ。今まで散々やられてきた仕返しだ。このくらいは許されるだろう。

ソファアーに座ると、サーシャも目を輝かせて近づいてきた。初めて見る治癒魔法への期待が隠しきれしていない。

こういう時のサーシャは何を言っても駄目だった。言っても話を聞いていないし、興味が最優先されてしまう。今更、やっぱり止めておくなどと言えば、アイリスではなくサーシャに引き止められる事になるのは目に見えていた。

アイリスが呪文を呟くと、軽く握った手の中に淡い緑色の光が生まれた。彼女が私の顔の側でそっと手を開くと光はふわっと飛んで口元に吸い込まれるように消えた。口から頬にかけてじんわりとした温かさが広がった。

「すごい……、治ったわ！」

サーシャの感心したような声でこれで終わりだと知る。自分では口元がどうなっているかは見えない。

触れてみると、確かに切れていたところが元に戻っている。瘡^{あざ}も消えたのだろう。

「ありがとう」

それを聞くとアイリスはちょっと首を傾げてどこか困ったように微笑んだ。

細められた明るいエメラルド色の瞳はいつもより数段優しい。いつも思うことだが、何も言わずに微笑むアイリスは綺麗だった。ぱっと目を引く派手な美人ではないが、彼女には年齢のわりに落ち着いていた、大人びた美しさがあった。

ややそっけない態度が嫌味にならないのは、彼女の雰囲気のなせる業だろう。必要以上には笑わないし、男性に媚びたりはしない。同じ貴族の娘でも、これは彼女と上辺を取り繕う令嬢たちとの大きな違いだった。社交界を嫌っている本人は知らないだろうが、アイリスは男性の間では密かな有名人だった。近寄りがたい、高嶺の花

として。

アイリスを見つめたまま動かない私に彼女は怪訝そうな顔をした。

「もう、終わったわよ？」

「……ああ」

曖昧に返事をして何事もなかったかのように立ち上がる。

はしゃぐサーシャの声を背中に聞きながら、まだどこか光の温かさが残るような口元を指でなぞった。

そうだ。急ぐ必要はどこにもない。

まだ先程の光のような淡い想いは、これから強くなるのだろう。

私はその根拠のない確信に、自然と頬が緩むのを感じていた。

嵐の夜1 アイリス（前書き）

嵐の夜と言えば、サーシャが酔っ払った夜。
酔った彼女は何をしたのか……。
本編第二章、お酒・頭痛の間の小話。

嵐の夜1 アイリス

「……うふふっ……」

隣ではサーシャがサラダのオレンジをフォークで突きながら一人で楽しそうに笑っている。

少し前からずっとこんな調子だった。彼女は酔うと楽しくなるタイプらしい。

「これじゃあいつもと大して変わらないんじゃないか？」

ロレンスの言葉に思わず笑ってしまう。

「確かにそうかも」

笑った私を見たサーシャがまた声を上げて笑う。顔はほんのり赤くなっているし目もいつもより潤んでいる。完全に酔っ払いだ。

「おい、もうその辺にしておけ」

ずつと苦々しい表情のジェラルドがグラスにワインを注ぐようにしたサーシャを止める。さっきからジェラルドが何度声をかけてもサーシャは全く聞こうとしない。

それもそのはず、サーシャがワインを飲んでいるのはジェラルドへの当て付けのようなものだった。彼は、サーシャが初めてワインを口にして「甘い匂いなのに思っていたより苦くてちょっと渋いわ」と少し顔をしかめて言うのと、ほら見ろといった顔で「子供の飲み物じゃないんだ」と返した。わざとやっているのかと思うほど絶妙なタイミング。再び子供扱いされたことにムツとしたらしいサーシャはその後しばらく無言で飲み続けた。

その結果が今の状態だった。

「ワイン飲むだけで楽しくなれるんだったらいいじゃない」

思わず本音を漏らす。それにサーシャは飲んだといっても大した量じゃない。ボトルの4分の1飲んだかどうかだ。

「まあ、悲しくなるよりはね」

ロレンスが曖昧に笑いながら言っただけ私を見る。睨み返すとあっさ

り視線を逸らされた。

「あら、どこ行くの？」

サーシャは一人グラスを持ったままふらふらと隣のリビングへ歩いていく。

「別に向こうには何もないし大丈夫だろう」

ロレンスの言葉にとりあえず私たちは食事を続けた。しばらくしてサーシャの笑い声が聞こえて来るまでは。

「何をやっているんだ」

ジェラルドが呆れたように言う。

「見て来たらいいだろう。君の責任は大きいよ」

反論できなかったらしいジェラルドは立ち上がった。

でも、彼が行ってから笑ひ声は止まない。なんだか楽しそうに話している声が聞こえて来る。酔っているせいかもしれない。声が大きくてよく響くのだ。

……ジェラルドとあんなに楽しそうに話しているのかしら。

気になった私は立ち上がった。

「私も様子を見てくるわ」

「向こうで飲むか」

「そうね」

頷きグラスとボトルを持ってリビングに向かった。

リビングでは床にぺたりと座り込んで嬉しそうに植木鉢に話しかけるサーシャがいた。ジェラルドはその向かいに片膝をついてしゃがみ、何やら宥^{なだ}めている。

「……ぷっ……」

「……くっ……」

同時に吹き出した私たちは顔を見合せて笑ってしまった。

「これは、なんと言うか……」

ロレンスは笑いながら首を振る。どう表現すればいいのか分からないらしい。

「あんなに嬉しそうに何を話しているんだか」

私も笑いながらソファの真ん中の低いテーブルに持っていたグラスとボトルを置き、腰を下ろす。ロレンスも隣に座った。

「おい、それは止める」

「どうして？」

「鉢植えだぞ」

「植木さんも飲むわよ、ねえ？」

サーシャはグラスを傾けてワインを植木鉢の中に注ごうとしていた。私とロレンスはさきつからずと、二人の可笑しなやり取りを笑いながら見ているだけだ。

「あつ！ダメっ！」

ジェラルドは無理やりサーシャからグラスを取り上げ、中身を飲み干した。

「もう部屋に戻って寝ろ」

「……イヤっ……！」

サーシャはぶいと横を向いてぱつと立ち上がった。そのまま食堂に小走りで戻って行ってしまふ。

ジェラルドに向かって嫌って……。

私はもう完全に傍観者だった。ジェラルドがどう相手するのかすごく気になる。

逃げていくサーシャの姿を呆然と眺めていたジェラルドは額に手をやって首を振り、一度大きく溜息をついた。それから立ち上がって床に下ろされていた植木鉢を窓辺に戻す。窓の外では雨と風がかなり激しくなっている。

戻ってきたサーシャの手には新しいグラスが握られていた。そのままにここに私たちの前にやって来る。

「どうぞ」

にっこりそう言って私のグラスにワインを注ぐ。

「ありがとう」

「ロレンスも、どうぞ」

「ああ、ありがとう」

それから最後に自分のグラスにも注いだ。

「おい、もう飲むな」

投げかけられたジェラルドの言葉にサーシャは彼を振り向いた。

でも、何も言わずに首を傾げてにつこり笑うと見せつけるように一口飲んだ。

それを見て諦めたらしいジェラルドは私たちの反対側のソファーに体を投げ出して座った。

「お前らでどうにかしろ」

「お手上げね」

疲れた様子のジェラルドが珍しくて笑っていると、隣のロレンスの視線を感じた。

「なに？」

「君も酔えばいいのに」

私を見てふつと笑って言う。

この男はどこまでが本気でどこまでが冗談なのかいまいちよく分からない。だって、今の台詞だって時と場所によれば口説き文句だ。そう思いながらいつものように軽く返す。

「冗談言わないでよ。私が酔ったらもつとややこしいわよ」

「私の胸くらいならいつでも貸すよ」

「なに言ってるの。部屋の隅に丸まってぐずぐず泣くからややこしいんじゃない」

それを聞いたロレンスは静かに笑い出す。

その時、窓の外が短く光った。

「あ、雷だわ」

私の声に窓の側に立って再び植木鉢と話していたサーシャは顔を上げて動かなくなった。窓の外を凝視している。

するともう一度短く光り、今度は微かな音が聞こえた。それを見たサーシャは窓の外を見つめたままゆっくり後ずさり始めた。

「雷が苦手みたいね……」

呟くとロレンスが頷いた。次にどうなるのかみんな興味津々だった。ジェラルドまで面白そうな顔をしている。

それにしても、雷が苦手なんて本当に可愛い。

「笑っているけど、君は怖くないのか？」

「怖いわけではないしょ」

きっぱりと否定する。私はサーシャとは違って可愛くない女の子なのだ。

案の定、ロレンスは何かを言いたげに肩をすくめた。

「なによ？」

私はそれが気に入らず、喧嘩腰で聞き返した。彼の言いたいことは分かっているけど。

「何も」

ロレンスは笑いをかみ殺したような顔で答えた。

「きやつ……！」

その時、ドーンという音がした。窓のガラスが振動する。

サーシャは悲鳴を上げて慌てた様子でジェラルドの座っている二人掛けのソファーに駆け寄り、彼のすぐ横に座った。

雷には驚かなかったジェラルドが少し驚いたように眉を上げる。

サーシャの目は怯えた様子で窓の外に向けられたままだ。

……怖かったから誰かの横に座りたかったの？

確かに、ロレンスと私が同じソファーに座っているせいでジェラルドの横以外はすべて一人掛けだ。外が光る度に無意識なのかジェラルドに擦り寄って行っている。

「ひゃあっ……！」

ガンという今までで一番大きな音で、サーシャはついに両耳を塞いでジェラルドにぴったりとくっつき、彼の肩口とソファーの間に顔を埋めるように縮こまった。小さく震えているのがまるで小動物みたいだ。

その様子にふっと小さく笑ったジェラルドはサーシャの頭を見下

ろして静かに自分の方に抱き寄せた。

あらあら……と思う。まあ、この距離で手を伸ばすなっていう方が無理よね。

サーシャは抱き寄せられるがままジェラルドの胸にしがみつき、顔を埋めて小さくなっている。私はそれを見て、怖いと言っていたジェラルドに自分から近づかせるお酒の力つてすごいわと変な感心をしてしまった。目を細めたジェラルドはそのまま子供にするように優しく髪を撫でている。

「ねえ、なんだかお邪魔ね」

ロレンスの方を見てそつと言うと彼は小さく笑った。

「片付けようか」

「ええ」

私たちは飲んでいたグラスとボトルを手に食堂へ戻った。並べた料理や食べた後のお皿はもう綺麗に片付けられていた。誰もいない台所に入り、使ったグラスを水で洗う。そのまま雷が通り過ぎるまで、私とロレンスは食堂でとりとめのない話をしていた。

リビングを覗くとサーシャは眠っていた。抱き寄せられた姿勢のまま、手はジェラルドの服をしっかりと握り締めて。

「死にそうだな」

ロレンスが笑う。確かに、ジェラルドはすごく疲れた顔をしている。

「右の奥の部屋で良かったか？」

彼はロレンスには答えず、私を見上げた。

「ええ、お疲れ様」

ジェラルドはそのままサーシャを抱いて部屋を出て行った。

その後ろ姿を見て、二人は案外上手く行くんじゃないかしらと考えた。ジェラルドは前よりもずっと表情が分かりやすくなった。

でもその前に、明日のサーシャは大変なことになりそうと明日を

想像した私はこっそり笑いを堪えた。

嵐の夜1 アイリス（後書き）

本編の更新が遅れていて申し訳ありません……！

とりあえず、今回はこれだけ。

いつも読んでくださっている方、ありがとうございます！！

嵐の夜2 ジェラルド（前書き）

嵐の夜1をジェラルドサイドから。

完全にサーシャのペースです。

彼がサーシャに言えなかった苦悩の訳は……。

嵐の夜2 ジェラルド

「……うふふっ……」

目の前ではさっきから娘が一人で楽しそうに笑っていた。頬を染めて、目もいつもより潤んでいる。完全に出来上がっていた。

「これじゃあいつもと大して変わらないんじゃないか？」

「確かにそうかも」

二人の呑気な会話に思わず鼻を鳴らした。

まあ、確かに酔って殴り合いを始める軍の男共には比べたら、一人で笑っているだけの娘は可愛いもんだ。ロレンスがそのうちの一人だと聞いたときには俺も密かに驚いたが。

そんな事を考えていると、娘がまた瓶に手を伸ばした。

「おい、もうその辺にしておけ」

声をかけると、娘は一瞬だけ怒ったような顔を俺に向けて、ふいと顔を背けた。潤んだ目で睨まれても全く迫力はないが、これはこれで厄介だった。彼女はそのまま俺を無視して自分のグラスにワインを注ぐ。グラスの半分までワインを注ぐと瓶をテーブルに戻し、俺に向かってにっこり笑った。

悪意のない満面の笑みを向けられて、本気で止める気がなくなっている自分に気づいた。この顔をされると弱い。そう思い、俺は心の中で大きく溜息をついた。

すると、彼女は突然立ち上がった。グラスを持ったまま覚束ない足取りでリビングの方へ歩いていく。

「あら、どこ行くの？」

「別に向こうには何もなし大丈夫だろう」

ロレンスの言葉に、それもそうかと納得し、俺たちはそのまま食事を続けた。しばらくして、また、彼女の楽しげな笑い声が聞こえてくるまでは。

「何をやっているんだ」

心で思った事を、口にしてしまっていた。

「見て来たらいいだろう。君の責任は大きいよ」

隣の男に他人事のように言われた俺は立ち上がった。仕方がない。俺にも責任があることは否定できない。

俺はリビングに入り目にした光景に呆れ果てた。

娘は床に座り込んで何やら熱心に、植木鉢に話しかけていた。窓枠に置いてあったはずの植木鉢をわざわざ床に下ろしたらしかった。酔って植木鉢に話しかけるなど聞いた事がない。

俺は彼女の向かいに片膝をついてしゃがみ、目線を合わせた。

「あ、ジェラルドも来たの？」

彼女は嬉しそうな顔を向けてきた。

「植木さん、ジェラルドが来たわよ」

娘には植木鉢が人に見えているらしかった。

「ジェラルド、植木さんよ。今さっきお友達になったの。もうすぐ花が咲くんですって」

彼女はそう言いながら植木鉢を指差した。確かに、つばみが付いている。

「植木さん。こちらはジェラルド。私のお友達なの」

頭痛がしそうだ。俺はお友達だったのか。

「おい、もう寝たらどうだ？」

俺はこの行く先の知れない話し合いを止めさせようとした。俺に植木鉢の声は聞こえない。

「どうして？」

目を丸くしてきょとんと首を傾げて聞いてくる様子は、何とも愛らしかった。

「酔っているだろう。それにいつもならもうそろそろ寝る時間だろう？」

まだ大分早い俺は適当に丸め込もうとした。

「酔ってないもん！また子供扱いした！」

彼女は気に入らなかったらしくそっぽを向いて頬を膨らませた。そして俺へのあてつけのように持って来ていたグラスから一口飲んだ。

「ジェラルドはいつも私を子ども扱いするのよ。すぐに早く寝ろって言うの」

俺に対する不満を鉢植えにこぼす。普段からそう思っているのが酔っているせいで口に出たようだった。

しかし、俺が早く寝ろというのにも理由があった。彼女は夕食を終えてしばらくするとすぐに眠そうな顔つきになる。朝が早く夜も早いという元の生活習慣のせいだと思うが、本人はそれに気づいていないらしく眠そうに目をこすりながらも俺たちに合わせて起きようとする。その頼りなげな姿は愛らしく、ずっと見ていたいと思う一方で、無理に起きている必要もないと思うと次の日に支障が出ないよう早く寝ろとに促してしまう。

俺は子供じゃないか、と呆れながらも彼女をなだ宥めにかかった。しかし、彼女は全く聞こうとしない。

「早く寝ないと明日が辛いぞ」

「明日は歩かないもん」

「あまり飲みすぎると、明日頭痛がするぞ」

「今は大丈夫だもの」

「……どうすれば、お前の機嫌が直る？」

「ジェラルドも飲む？」

下手に出た俺を無視した彼女はグラスを目の高さに掲げた。

「あ、植木さんも飲む？」

思いついたように目を輝かせると、グラスの中身を植木鉢に注ぐとした。

「おい、それは止める」

「どうして？」

「鉢植えだぞ」

「植木さんも飲むわよ、ねえ？」

全く……。

「あっ！ダメっ！」

俺は無理やりグラスを取り上げて中身を飲み干した。

「もう部屋に戻って寝ろ」

そう言つと、娘は潤んだ目で俺を睨みつけた。

「……イヤっ！！」

それだけ言つてぱつと立ち上がる。彼女はそのまま食堂に逃げるように行つてしまった。

……嫌、とは……。

もう俺にはどうしようもない。彼女の後ろ姿を呆然と眺めていた俺は額に手をやって首を振り、大きく息を吐いた。それから立ち上がつて床に下ろされていた植木鉢を窓辺に戻す。

窓の外では雨と風が激しさを増していた。

戻つてきた娘の手には新しいグラスが握られていた。彼女はそのまま嬉しそうに笑いながらソファ―に座る二人の前に立った。

「どうぞ」

そう言つて、二人のグラスに順にワインを注いでいく。それから最後に自分のグラスにも注いだ。

「おい、もう飲むな」

近寄りながら声をかけると、娘は振り向いた。しかし、何も言わずに首を傾げてにつこり笑うとまるで俺を挑発するかのようにゆつくりと一口含んだ。

もう、好きにしてくれ……。

俺は彼女の相手を放棄して手前のソファ―に沈んだ。

「お前からどうにかしろ」

さつきから面白そうに傍観しているだけの二人に後を託す。もはや俺の手には負えないのは明らかだ。

変に疲れたような気がして、しばらくの間深くソファアに座っていると窓の外が短く光った。

「あ、雷だわ」

アイリスが声を上げる。もう一度短く光り、今度は微かな音が聞こえた。それを見た娘は鉢植えとの話し合いを止めて窓の外を見つめたままゆっくり後ずさり始めた。それは明らかに不自然な動きだった。

「雷が苦手みたいね……」

俺が思ったのとほぼ同時にアイリスが呟きが聞こえた。

これで子ども扱いするなと言う方が無理だろう。近くに落ちたらどうなるのか、俺は面白半分で娘を観察していた。

「きゃっ……！」

雷が音を立てて落ちた途端、娘は短く悲鳴を上げて慌てた様子で俺の座っているソファアに駆け寄り、すぐ横に座った。予想していなかった反応に眉を上げる。何故ソファアに座ったのか、俺には理解できない。

娘の目は怯えた様子で窓の外を真剣に見つめている。そして、外が光る度にびくつと肩を震わせ、俺の方へ少しずつ寄って来ていた。もう服が触れそうな距離だ。

「ひゃあっ……！」

ガーンという今までで一番大きな音で、娘はついに両耳を塞いで俺にぴったりとくっついてきた。俺の肩口とソファアの間に顔を隠すように縮こまっている。体が小さく震えているのが直に伝わってきていた。どうやら本気で怖がっているらしい。

助けて欲しくてここに来たんだと自分に良いように解釈した俺は、腕を伸ばして震える体を抱き寄せた。

抱き寄せられた事に気付いたら酔いが醒めるかもしれないという心配を他所に、彼女は俺の胸の辺りにしがみつき、自分から頬を寄せてきた。その愛らしい仕草に気を良くした俺は、長い髪に手を伸ばした。前にも触れてしまった彼女の柔らかな髪は、上等な絹のよ

うな手触りだった。

しばらく、ゆっくりと髪を撫でていた俺は、次第に善からぬ衝動を覚え始めていることに気付いた。雷鳴が轟くたびに、ぴったりと寄せられた体がびくつと震える。その度に、柔らかな胸が押し当てられる。立ち上るワインの甘い香り。そして、娘の口から漏れる熱い吐息のせいで、ただでさえ熱い体に、服まで蒸れて熱を持ち始めていた。

確かに、体は子供じゃないな……。

片腕で娘を抱えたまま、俺は天井を仰いだ。馬鹿な事を考えるな。酔っているとはいえ、自分を信じきっている娘を怯えさせるような事をするわけにはいかない。そう自分に言い聞かせ、必死に欲望を押さえ込む。

しばらくの間、天井を仰いだまま片手で目を覆い気分を落ち着かせようとしていると、腕の中の娘が小さく身じろいだ。我に返ったかと思い、視線を落とすと、彼女の手はまだ俺の服を握り締めたまま、あどけない表情で俺を見上げていた。

その紫の瞳を見た途端に、自分ではどうしようもない感情が胸の底から湧き上がってきた。

……愛しい。

もうこの感情は偽れない。諦めにも似た気持ちでそう思った瞬間、それを受け入れることに対する躊躇や戸惑いが嘘のように消えて行った。出会った時からこうなる事が決まっていたのだとすら思えた。彼女を愛しく思うのはごく自然な事なのだと。

「綺麗な色……」

まだ俺の胸に頬をつけたままの娘が、惚けたように呟いた。それにふつと笑いが漏れた。どこを見ているのか焦点の結ばない瞳。自分の言っていることが分かっているのかすら疑わしい。

彼女は少し体を起こすと、俺の顔を下から覗き込んだ。

その近さに息を呑む。潤んだ薄紫の瞳、上気したなめらかな頬、淡い紅色に色づいた艶やかな唇。全てが俺を誘っているようだった。

また体が疼き出し、俺は息を止めた。

酔っているとはいえ無防備に過ぎる。これで何も思ふなと言う方が無理な話だ。

「ねえ、すごく綺麗な色ね。私が知っている中で一番綺麗な青色」
青、と聞いて自分の目の事を言われているのだと分かった。綺麗などこの娘に言われるとは。苦笑が漏れる。

「お前の方がよっぽど綺麗だ」

神秘的で最も高貴な色の瞳。目が合うたびに綺麗だと思う。いや、瞳の色だけじゃない。子供っぽい無邪気さが先に立ち、普段は忘れてしまいがちだが、彼女は飛びぬけて美しい。道行く男たちが振り返るたびに思い知らされるのだ。

娘は驚いたように何度か瞬きすると、柔らかに笑った。

「うっん、ジェラルドが一番綺麗」

それだけ言うと、また俺の胸に顔を埋めて目を閉じた。

俺は安心して、呆然と娘を見下ろした。

彼女は安心しきったように穏やかな顔で俺に全ての体重をもたせ掛けている。彼女が自分の物だと錯覚してしまいそうだった。

しかし、最後に見せたあの笑顔がひどく胸を乱していた。何の汚れも知らない無垢な笑顔。

……狂わされる事になりそうだ。

俺はその笑顔に、僅かな不安と恐れに近い感情を抱いていた。

「死にそうだな」

俺を見るなりロレンスは面白そうに笑った。なるほど自分は酷い顔をしているらしい。耐え抜いた自分を褒めてやりたい気分だった。次を耐えられる保障はどこにもない。

「右の奥の部屋で良かったか？」

俺はアイリスを見上げた。彼女は笑いたいのを堪えているような顔をしていた。

「ええ、お疲れ様」

ベッドに寝かせても、娘は身じろぎ一つしなかった。わずかに口を開いて静かに寝息を立てている。その横に腰掛けて、前にもこうして彼女を運んだことがあったなと懐かしく思い出した。その時はほんの子供だと鼻で笑ったのだった。それが今はどうだ。

……どうかしてるな。

そう思い、安らかな寝顔に目を細める。彼女は誰にでもさっきのように縋りつくのだろうか。酔っていたら、雷が怖かったら、そこに居る誰にでも？それとも、自分は気を許されていると思ってもいいのだろうか。俺には外から見ているだけでは判断できない。この娘は誰にでも簡単に無邪気な笑顔を見せるのだ。

まだほんのり色づいたままの頬に触れようと手を伸ばすと、彼女はまるでそれが分かっていたかのように、タイミング良く寝返りをうった。うつ伏せになり反対側を向いてしまったせいで表情が見えなくなる。娘はそのまま嫌々というように枕に押し付けた顔を小さく動かした。

「んん……、ダメ……、しょ……」

「くっ」

俺に向けられた寝言だった。出鼻をくじかれた俺は思わず噴出し、中途半端に伸ばした手で仕方なく頭を撫でてから、立ち上がった。また静かな寝息を立て始めた娘を見下ろして、彼女に触れなくて良かったのかもしれない、と思う。自分でもほとんど無意識で何をしようとして手を伸ばしたのか分からないのだ。これ以上ここに居て起こしてしまうのも忍びないし、寝ぼけて抱きつかれでもしたら今度は冗談では済まされなくなる。

それでも、笑いが収まらなかった。本当は全部分かってやっっているのかと疑ってしまう。締めりのない顔のまま部屋の外に出た俺は、その後、吹き荒れる風の音を聞きながら一人で飲み直した。

嵐の夜2 ジェラルド（後書き）

ええつと、ごめんなさい（とりあえず謝ってみる）。

自分で書いておきながら、ひええつとなりました。アップしよう
が大いに迷いました。もう、恥ずかしすぎて……！笑

それでもアップしたのは、ここがジェラルドの苦悩の始まりだっ
たりするからなのです（笑

いえ、でも。これで手を出さなかった彼は大人ですよねっ！？

……ああ、彼のイメージが崩れないことを祈ります。

以上独り言でした。

本編の更新が遅くてすみません……。楽しみにしてください
の方、申し訳ないです。なるべく早く頑張ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8732e/>

ゲーテンベルクの歌 【Side Story】

2010年10月28日08時48分発行